

情報帰属理論とその人称性に関する 基礎的考察

山 岡 政 紀

1. 認知科学とメンタル・スペース

認知科学の関心の対象は「認識」であり、現代における（二十世紀の）哲学、つまり認識論の関心の対象と基本的に一致している。それは、経験科学がデカルト的二元論を背景とすることによって棚上げしてしまった領域である。しかし、認識に対する接し方において、相違点が見られる。哲学は、我々人間の生活そのものであり諸々の経験科学の前提でもあるところの自我意識を、整合性をもって理論の内側に収め得るような、より高次のレベルの理論を求めようとしている。一方、認知科学はむしろ認識の問題を経験科学と同次のレベルにおいて理論化しようとする。そのため、現時点では、認識とは言っても、そのうちの情報処理という知的能力、より厳密に言えば記号処理能力を対象にするのみで、哲学の議論のダイナミックさに比べるといささか平面的な印象がある。

次に、認知科学が認識の問題を経験科学的に処理しようとするための前提としている立場が「機能主義」である。これにより、諸能力をつかさどる物理的、神経学的な構造に言及することなく、諸能力の計算的挙動のみに注目することができ、それによって認識の問題を経験科学的に処理し得るようになったのである。人工知能研究が認知科学に何かを貢献できると見るときには、必ず機能主義という前提があるのである¹⁾。

しかし、ここでは、認識論と認知科学の差異よりも、むしろ、「経験科学的」と「機能主義」の二つのタームの介入を除外した場合の、認識論と認知科学の同質性を強調しておきたい。特に本来、共通の対象領域に向かおうとしたものであるという、冒頭に述べた一点が重要である。

さて、認知科学の一つの方法論として近年盛んに論じられている、メンタル・スペース理論（心理空間理論）はもともとと言語学の一つの方法論だった。

簡単に言えば、「認識」を考慮して「言語」を解明しようとしたものであって、「認識」そのものを解明しようとしたのではなかった。このメンタル・スペース理論は如何なる点において認知科学であり得るのだろうか。

メンタル・スペース理論は、フォコニエの論考が発端である。その対象領域における特徴は、主に名詞句の解釈に関してそれまで処理しにくかった問題、例えば定・不定表現や前提投射に関わる語用論的諸問題に着手したことである。一方、方法論は、言語表現と現実世界とのインターフェイスとして複数のメンタル・スペースを設定して、それによって「可能世界」や「時間の断片」や「信念」といった直観的概念における解釈の変異を、スペース間の一種の関数としてリンクさせ、そこに語用論的諸条件を適用して捉えるというものであった。その特徴を一言で言うなら、従来、言語表現の構造が一義に決定するいわゆる文字どおりの意味に対して、外側から付加的に働くと考えられていた語用論的諸条件を、そのまま構造の一部として扱っている、という点である。故にここでは意味論と語用論の明確な区別が無い。

ここで問題になるのは、インターフェイスとして想定されるスペースと言語表現と認識の三者がどのような関係にあるか、ということである。Fauconnier (1988) では、解釈の変異は「中間的レベル」において生じる (Fauconnier (1990) では、これを「レベルC」と呼んでいる) としている。このレベルを設定することによって、言語表現が意味を決定する、との一般的な言語学の見地を否定しているのである。言語表現が示すのはスペースの構造だけである。その中で、それぞれの要素に如何なる役割と値を与え、それらにどのような符合条件を適用するかが、語用論的に規定され、それによって解釈される意味が決ってくる。ここで想定された中間的レベルが、認識そのものかどうかということが重要である。

Fauconnier (1984) によると、言語表現をスペース導入表現として、信念スペース、願望スペース、時間スペース等が導入される。Fauconnier (1988) においても、限量子スペースを導入するのは、名詞句の数範疇などによる限量子、といった統語範疇である。従って、言語表現とこれらスペースとの間には一切余剰がない。つまり、彼が言うところの「スペース」は決して認識の様態を示しているのではなく、解釈の変異が生じる因果関係を説明するための都合のよい図式を仮設したに過ぎない。しかも、言語表現が具現化されないうちはスペースは想定され得ない。従って、そのような言語表現の発話を動機づける内的状態について、この理論は一切言及しないことを意味する。しかし、認知

科学に寄与するためには、言語に対して認識の方が存在論的には優位であることが率直に認められなければならないだろう。ともあれ、フォコニエがこのような言語表現からの制約の甚だ強いスペースを認識の一つの様態であると考えていたとは、まず考えられない。

問題は、そこでの解釈の変異が何によってもたらされたと見ているか、ということである。フォコニエの論では、多くの場合、表現の要素である名詞句の解釈において「役割」を選ぶか「値」を選ぶか、どの要素がトリガー、ターゲットとなるか、といった要素の取り方、また、スペース内のどの要素とどの要素に「符合条件」が働くのか、スペース間のどの要素がコネクターで写像されるのか、といった要素間の関係に関わる基本原則などに集約される。これらを認識レベルと呼ぶことは適切だろうか。相対的な関係性から言えば、「中間的」レベルであることは確かである。しかし、認識レベルであることを認めるには、そのレベルが言語表現のレベルと対等に、一つの独立した構造を持っていることが積極的に論じられることが必要ではないだろうか。さもなければ、あくまで認識のうちの言語の運用に関与する部分、と限定するか、あるいは認識と言語の運用は全く同一の問題である、と積極的に主張するかしなくてはならないだろう。

筆者の私見では、人間が言語によって表現し、理解するところの「意味」と、言語表現が表現し得るところの「意味」との間にズレがあって、そのズレを埋める理論がメンタル・スペース理論であると考えている。その場合、前者の「意味」は言語的意味とは別の何かかと言うと、おそらくはそうではないだろう。例えば、人間の論理・思考が複雑化するに伴い、表現すべき言語的意味の構造が多様化したのだが、自然言語の表現構造がその多様化に即応して変容するだけの柔軟性を持っていなかった、そして結果として、単一の構造のまま複数の意味を解釈として派生することになった、というような事情が考えられる。そうであるならば、フォコニエは、言語表現によって表現されない「言語的意味」を、「中間的レベル」と呼んでいるに過ぎないことになる。あるいは、人間の論理は思考が本質的に柔軟で、自然言語の構造が本質的に固定的で、そのズレというものは、本質的に自然言語についてまわるのかもしれない。そうであるとしたら、人間の論理・思考の本質について、言語表現とのズレという限定された部分に関しては明らかにできるということになる。いずれにしても、メンタル・スペース理論はすべての言語表現に対する説明として、常に強力に効果を発揮するのではないだろうということが容易に想像できる。例え

ば、動詞の形態論と密接に関わるテンス、アスペクト、ヴォイスの研究に活かせるだろうか。固定された解釈を否定するとの見解がこれらに対しても強力に適用されるのだろうか。現段階では疑問である。逆の方向から換言すれば、彼が「中間的レベル」と呼ぶものの大半は他のもろもろの「言語表現」のレベルと同次元のレベルなのであって、ただ彼が他の言語表現のレベルの問題に言及していないだけである。この理論はいわば、上に述べたズレに対する「対症療法」的な理論だと言えよう。

Fauconnier (1984) の訳書である坂原等 (1987) の「訳者あとがき」でも、メンタル・スペース理論の目的について「自然言語の意味的・論理的操作を既成の理論よりうまく記述・説明できる意味論の構築」と説明されている。つまり、メンタル・スペースはあくまで言語学の理論であることは、少なくとも日本における関係者には既に周知のこととなっている。

冒頭でこの理論の特徴について対象領域と方法論の二点から述べたが、要するに、方法論に「認識」に関する仮定を用いてはいるが、対象領域は「認識」ではないのだから、認知科学の対象領域を認識論と共通のものとする限り、この理論を認知科学とは認め難いのである。

ただ、解釈を決定する語用論的要素について言語表現と対応した形で規定しないという点で、少なくともそれまでの統語論や音韻論などに比べれば、中間的レベルを用いて論じる、というのは大きな特徴である。また、逆に、言語分析哲学のように「言語」と「認識」の関係を深く見積った立場の哲学に見られる言語中心主義も克服していることは、認知科学としてこの理論が議論されるに足るだけの材料ではあるが、理論の位置づけに当たる基礎的な議論がもう少しなされる必要がある。この問題は複合的である。認知科学がどうあるべきか、という問題と、メンタル・スペース理論がいかなる理論かという問題と両方が解決されなければ、結論は出ない。

この種の議論は、生成文法を認知科学として論じようとした言語学者に対する認知科学者の失望を彷彿とさせる²⁾。むしろ、純粹に言語学としての正当性が議論されるべきなのであって、そこに不必要な論争が持ち込まれないよう、認知科学に首を突っ込むのは避けたほうがよいのかも知れない。

2. 情報帰属理論について

メンタル・スペース理論のもう一つの特徴として、認知インターフェイスとしてのメンタル・スペースを設定するという方法論を、幅広い対象領域に対し

て応用できるのではないか、という可能性を期待させる点が挙げられる。日本でも金水 (1988), Omori (1988), 田窪 (1989), 坂原 (1990) などメンタル・スペース理論を用いて新しい対象領域に着手した研究も既に見られる。ここでは、金水敏、田窪行則両氏の一連の論考に注目し、特に方法論における独自性について考えてみたい。

金水 (1988) では、日本語の指示詞の用法という、フォコニエの関心とは全く異なる対象領域に着手した。方法論としては、スペース導入表現なしに義務的に話し手の空間 (基底空間) と聞き手の空間 (相手空間) を設定し、相手の知識との関係などの考慮を、指示詞の指示対象がどの空間に所属する情報であると見なすかに置き換えて定式化し、より巨視的な視点から考察している。三藤博氏はこの点を捉えてか、金水氏の理論を「情報帰属理論」と称したそうだが、メンタル・スペース理論とは別の理論であるとの線引きを意図したのだろう。無論、スペース設定の方法論的な意義を考慮すれば、それらは一つの大きな理論体系に含まれる派生的な応用と見ることができる。しかしながら、本稿ではむしろ、認知科学全体の方法論との関連から、情報帰属理論 (本稿では、以下このように呼ぶ) の独自性を取り立てて注目したいと考える。

まず、第一に基底空間、相手空間の二つの空間を、導入表現を必要としない初期空間として発話時にデフォルトに存在するものと位置づけることである。何かを語る以前に、相手と向かい合っただけで、そこに一つのスペースが想定されるのである。第二に、それらが人称性と深く関わっているということである。つまり、大まかに言って主観的存在である話し手自ら (自分) の領域 (第1人称) と、相手という一種の疑似主観の領域 (第2人称) とをメンタル・スペースという形で区別している、という点である。

またこのような特徴は田窪 (1989) で「談話管理理論」と呼ばれているものにおいても同様に顕著である。日本語では、ある要素について、話し手がその要素を聞き手と知識として共有しているとみなすかどうかによって、その要素への言及の形式が区別されることを論じたものである。その際、田窪氏が用いた図式では、起点スペースとして話し手スペース R が設定され、その内部に聞き手スペースがつくられ、 R から要素が写像関数によりコピーされるとする。この図式でも、基本的に上に述べた二つの特徴が見られる。これらの特徴は普遍的な言語現象の記述の一般性を高く持っていると考えられる。金水・田窪 (1990) では、金水氏が論じていた指示詞の理論がこの「談話管理理論」をもとに論じられているのもその一つの表れであろう。

さて、前節では、メンタル・スペース理論は認知科学とは認めにくいと述べたが、筆者は、むしろ情報帰属理論の独自性の方に、より認知科学の関心に近いものを答えられる可能性があると考ええる。その理由について次節で述べる。その前にここで、認知科学において人工知能研究などの前提となっている「機能主義」はとりあえず排除しておきたい。機能主義によって無視され、認識論では逆に最も問題となっている「直観」に直接的に取り組むためである。

3. 言語現象学と人称性

徹底的な形而上学であるところの現象学と経験科学的な認知科学との意外な接点を見いだしたのはホーレンシュタインである。彼の主張は、まず、言語分析哲学に対する批判から始まる。分析され、単一機能化された（とされる）形式そのものが、分析者が有している個別言語の体系から依然として直観的に制約を受けることや、言語環境によって発話行為上の機能が多様化すること（語用論的多機能性ともいうべきか）を無視している点を指摘する。

一方、認知科学については、経験科学に厭われてきた主観的経験の世界に踏み込んだことを評価している。ただし、認知科学の「機能主義」なあり方に対しては、意識の内的状態に言及しないものであり、依然として批判的態度をとっている。そこで、彼は「言語現象学」という独自の用語を用いて、自らの立場を主張しようとしている。この用語自体について彼自身は定義をしていないが、彼の意図はほぼ以下のようなものだろう。真に自我意識の内観の科学たるためには、形態論、統語論の上で見られる言語構造や、論理学の諸問題など、何らかの形式、またはモデルとして設定されるものを、そのまま認知構造として論じることとは否定される。そして、記号的とされる言語表現と、本来非記号的とされる生活世界の認識様態との写像が必要になろう。ここで両者の関係は対等であり、いずれかがいずれかに従属するのではないだろう。しかし、認識様態とは違って言語表現は経験的に考察することが可能である。従って、人間の諸経験の集積の中から、言語表現の上から観察できる事象をもって、経験に対する認識の様態を抽象するのである。

筆者は、ホーレンシュタインの流れに乗ることには決してこだわらないが、認知科学の一つの方法論としての「言語現象学」的立場を明確にすることは有益であると考ええる。

この立場から見ると、メンタル・スペース理論は、確かに大きな前進をしている。ホーレンシュタインの立場では、言語表現の解釈を常に一義に決定する

ような統語論的解釈を拒否している。メンタル・スペース理論ではひとまずその点を克服できたと言ってよいだろう。問題は、スペースと言語表現との関係である。真に言語現象学的であるためには、内観によって記述される、認識の様態が、言語表現の説明に寄与することが必要であろうと考える。これは、認識が言語に対して存在論的に優位であることを認めるということである。つまり、スペースは言語表現によって導入されるのではなく、認識の様態として言語表現に先行して設定される必要がある。しかも、そのスペースがどのように設定されるかは、内観によるのである。この設定は理論の手順から言えば、仮設であり、言語表現に対してどれだけ説明力があるか、によって証明される、と考える。ここでは言語表現はむしろ、立論の一部を成すに過ぎないのである。

さて、前節で述べた、情報帰属理論の特徴は、上で述べた言語現象学的な立場と適合するものであることは、既に明らかになっている。

また、現象学的に内観される認識の様態の一つの大きな特徴は「相互主観性」である。ホーレンシュタインの立場も、相互主観性を論じることによって自然的態度を自然主義的態度と区別して肯定的に論じた後期フッサールの思想に依っている。

これが言語構造に直接反映したものが「人称性」であろう。前節では、「情報帰属理論」の特徴として「人称性」を挙げたが、ここで既に現象学的な立場が理論に活用されていることの反映と見ることができる。

全くの主観性に基づいて生成され、理解されるところの言語によって、人は別の主観との意思の交流を行う。その際、自らの用いる言語と、相手の用いる言語とが共通の構造を持ち、共通のしかたで意味解釈を行っている前提することが、言語使用を可能にする。逆に、他者に主観を認めないかぎり、言語使用は成り立たない。まさに言語の世界こそ、相互主観性の世界である。その中では、自分における「私」は相手における「あなた」であり、自分における「あなた」は相手における「私」となる。つまり、主観的な存在である人間にとって絶対的であるはずの「私」が、言語使用においては相対化される。

さて筆者は、具体的には、知覚・感情の内的経験との関連について論じようと考えている。これは、とりも直さずフッサールの「自然的態度」について考察することになる。自然言語の「自然」と自然的態度の「自然」という用語の一致は決して偶然ではない。つまり、人間は世界のすべての事象を自己の内側において知覚している。知覚以前に世界が実在しうるのかどうかを知覚自らは

明らかにすることができない。しかし、自然的態度において知覚以前の実在を認めることになる。その一つの基準となっているのが、主観的経験と客観的経験の区別であろう。つまり、「血は赤い」という陳述があった場合に、自己にとっての「赤」の知覚と他者にとっての「赤」の知覚とが同一のものである保証は全くなく、いかにしても証明し得ず、反証もし得ない。しかし、知覚というものは、自己の肉体の内側から外側に向かって機能していると我々は自覚している。故に、我々は我々自身の知覚に先行して物質的実在が存在することを信じて疑わない。これが自然的態度である。

しかしフッサール自身も、「現象学的還元」を強調して科学批判を行った前期思想から変遷して、後期思想においては他者存在と自己存在との同質性に大きく依拠しているところの「相互主観性」をもとに、我々人間の「生活世界」を重視する立場をとるに至っている。恐らく同質であろうと直観的に推察されるところの肉体上の視覚器官において知覚されるものを、同質と見なすことは正当な判断である。そして、言語表現において、自らの主観以外に他者の主観が存在することをもって成り立っていることを見い出せるのである。

全くの内的経験でしか在り得ない知覚を相互主観性として捉えるためには、内的経験としての知覚と外的経験としての知覚との質的差異が意識されていなければならないが、日本語ではそれが言語表現の人称性の差として表れている。故に、情報帰属理論が持つ人称性が、これに対する説明力を持っていると考えるのである。そのような立場のメンタル・スペース理論は、言語現象学の一つの方法論とすることができるだろう。

以上述べてきたようなことから、筆者は、人間が自らの知覚経験を主観的経験と客観的経験とに区別していることを反映している言語事象を説明するための試論として、日本語における知覚の表現形式としての形容詞述語文についての考察を別稿にてまとめた（山岡（未発表））。

4. 語用論的な「人称」について

最後に、前節で論じた、「相互主観性」の表れとしての「人称」についての言語学的分析について補足的にまとめ、筆者の立場を明らかにしたい。

人称は言語学的には三種類の表れ方をする。典型的な表れ方は、語彙項目として表れる人称である。日本語では、例えば、「わたし」、「あなた」、「かれ」など、いわゆる人称代名詞である。日本語では代名詞と普通名詞と固有名詞とは、それぞれが名詞の下位分類として対等の位置にある。これらはその指示機

能の違いにおいて分類される。その代名詞のさらに下位分類として人称代名詞と指示代名詞が区別されるが、両者を分類するのは指示する対象が人か人でないかという意味的側面のみである。これを語彙的人称と呼ぶことができる。

一方、英語などの印欧諸語に於いては、「人称」は統語範疇である。ラテン語では人称が動詞の屈折に関与する。英語など人称代名詞を持つ言語では、動詞の屈折に関与する人称は、主格名詞句の位置に人称代名詞として具現化する。また、人称代名詞自体も格によって、形態的に屈折する。この場合、名詞と代名詞とは統語的基準により分類され、さらに、下位分類の人称代名詞も、動詞の屈折との関連という統語的基準により、指示代名詞と異なる特徴を持つ。これを統語論的人称と呼ぶことができる。ラテン語では統語論的人称のみが観察され、英語などの多くの印欧語では、語彙的人称と統語論的人称が融合した形で見られる。

言語学の用語としての人称は、このような、印欧語での統語的現象に着目したものがほとんどであり、従ってそのような現象が見られない日本語に於いては人称の研究はさほど行われていない。先行研究では、わずかに三宅(1977)のように人称代名詞の語彙的研究や、鈴木孝夫(1971)、同(1973)のように社会言語学的分析などが見られるのみであった。

しかし、比較的最近になって、日本語の「人称制限」、「人称指定」と呼ばれる現象が文法学者からも指摘されるようになった(鈴木重幸(1975)、仁田(1979)、同(1985)、樋上(1979)、畠(1980)、水谷(1985)など)。彼らの論調は概ね、一種の統語的現象と見ているようだったが、彼らを取り上げた問題と連続する問題の中に、言語表現だけからはその解釈が規定できない、つまり、語用論的な分析を必要とする現象が見られ、筆者はそのような現象を論じつつ、問題全体が語用論的現象の各側面であることを主張してきた(山岡(1988)、同(1989a)、同(1989b))。これを語用論的人称と呼びたい。

語用論的人称が、関与する言語現象は、二つある。一つは言語表現には表れていないのに、意味的には確かに人称性が伝達される、ということである。筆者が取り上げる現象はこれが中心である。いま一つは、本来人称を表示する機能を持たない語彙が、当該の発話で人称性を持つ、という現象である。日本語ではそのような事例が多数見られるので、人称を論じるときには、人称代名詞よりも人称詞(自称詞、対称詞、他称詞)として議論される。具体的には、人称代名詞ではない、固有名詞、親族名称、職名などが、具体的発話状況に応じて、人称詞となる。「先生は、今、何と言いましたか。」の「先生」は自称詞、

対称詞、他称詞のいずれに解釈される場合もあり得る。そのいずれであるかを決定しているのが、語用論的人称である。鈴木孝夫氏の人称詞の研究は、語彙の選択に関わる議論であり、人称性の決定には言及されていない。

別稿の試みは、言語学の側からみれば、これらの語用論的人称を記述するのに情報帰属理論がどの程度有効かという試みであり、認知科学の側からみれば、相互主観性の有様を言語を通じて検討する試みである。

ところで、人称が相互主観性を映し出すものであるならば、印欧語に於ける統語論的人称にもそれはある形に映し出されているはずである。それは人称を決定する素性のあり方に見られる。まず、英語やドイツ語などを考えてみよう。第1人称、第2人称は人称代名詞のみが示し得るが、第3人称では、人称代名詞の他に固有名詞や親族名称などで人物を表現することも可能である。また、動・植物や、無生物、抽象概念などの非人物を意義としてもつ名詞も、第3人称であり、指示代名詞も通常はすべて第3人称である。すると、各人称が平行的に存在するのではなく、積極的に人称を表示するのは第1人称、第2人称のみであって、第3人称は人称という概念において中立的なものと言うことができる。Burling (1970) では、人称代名詞は「話し手」、「聞き手」の二つの素性がそれぞれ指示されているかいないかによって、十字分類をなし、そこに生じた四つのスロットの中で単数・複数の区別を行うことで、人称代名詞の項目が決定すると、分析されている。英語をはじめこれが適用される言語は多く、中国語も含まれる。この考え方では、第3人称というのは「一話し手」、「一聞き手」の場合（いずれも指示されていない場合）であって、積極的には規定されない（なお、この説の特徴は、中国語のように、いわゆる第1人称複数に *inclusive* と *exclusive* の区別がある場合に、前者を「+話し手」、「+聞き手」、後者を「-話し手」、「-聞き手」として、スロットに一つずつ収めることができる点にある）。ここで設定された素性のあり方は、相互主観性のもととなる素性が「私」と「あなた」の二項目しかないことと一致している。

以上のような観点からすると、「人称」という概念は、自然言語の特徴としても示唆的である。自然言語以外の形式言語には人称は表れない。

まず、記号論理学に於ける命題は基本的にすべて第3人称である。それは、主体（話し手）である特定の個人から聞き手である特定の個人に伝達されることを前提としないので、人称に関与していない、ということである。個人的主観の内に所属せず、常に公にさらされているものである。プログラミング言語も一種の数式ともいえるべきものであり、その事情は記号論理学とほぼ同じであ

る。語彙的に人称代名詞がそれらの言語の内側に含まれているとしても、人称性を担わない第3人称的な使用しかありえないであろう。

自然言語のみが人称を持つことは、唯一自然言語のみが、意思の交流を契機として相互主観性を形式の上に表すことを物語っていると言えよう。

【注】

- 1) 土屋 (1987) では人工知能研究が認知科学に貢献するための前提的立場として「記号主義」と「シミュレーション主義」を挙げているが、巨視的にみて「機能主義」に集約できると考える。なお、コネクショニズムのように記号計算以外の表象の形式的操作を扱う立場は、「記号主義」の上位概念として「計算主義」と呼ばれる。
- 2) 大津編 (1987) の本編の諸論文と、同書所収の波多野 (1987) とを読み比べてみれば、独立した科学としての認知科学にいささかでも関心を持つ人は、波多野氏に賛同することだろう。

【参考文献】

- BURLING, Robbins (1970) *Man's Many Voices*: Holt, Rinehart & Winston
- FAUCONNIER, Gilles (1984), *Espaces Mentaux* (邦訳『メンタル・スペース』坂原・水光・田窪・三藤訳1987, 白水社)
- FAUCONNIER, Gilles (1988), Quantification, Roles, and Domains, in U. Eco et al. ed., *Meaning and Mental Representations*: Indiana U. P., 61-80
- FAUCONNIER, Gilles (1990), 領域と結合 (Domains and Connections) 『認知科学の発展 Vol.3』(坂原茂訳), 講談社サイエンティフィック, 1-28
- GARFIELD, Jay L. (1987), Philosophy: Foundations of Cognitive Science, in N. A. Stilling ed. *Cognitive Science An Introduction*: The MIT press, 305-361
- 畠 弘巳 (1980) 文とは何か 『日本語教育』第41号, 198-208
- 波多野 誼余夫 (1987) ナイーブな認知科学者の視点から, 大津由紀雄編『ことばからみた心—生成文法と認知科学』東京大学出版会, 191-203
- 樋上 勲 (1979) 主語と主題 『英語と日本語』くろしお出版
- HOLENSTEIN, Elmar (1980) *Von der Hintergeharkeit der Sprach* (邦訳『認知と言語』村田・柴田・佐藤・谷沢訳1984, 産業図書)
- 金水 敏 (1988) 日本語における心的空間と名詞句の指示について 『談話・意味・語用論』科学研究費特定研究成果報告, 15-40
- 金水敏・田窪行則 (1990) 談話管理理論からみた日本語の指示詞 『認知科学の発展 Vol. 3』講談社サイエンティフィック, 85-116
- 三宅 鴻 (1977) 日本語の一人称代名詞 『ロマンス語研究』第11号, 113-120
- 水谷信子 (1985) 『話しことばの文法』くろしお出版
- 仁田義雄 (1979) 日本語の表現類型 『英語と日本語と』くろしお出版, 287-306
- 仁田義雄 (1985) 主格の優位性——伝達のムードによる主格の人称指定—— 『日本語学』第4巻第10号, 39-52

- 野家伸也 (1989) 現象学と認知心理学『哲学』第39号, 30-41
- OMORI, Ayako (1988) Exploration into Mental Space: Where do Linguistic Expressions Come from?, in English Linguistics 5 日本英語学会, 130-149
- 大森荘蔵 (1963) 他人と言葉『東大教養学部人文科学紀要』第29号 (『言語・知覚・世界』1971, 岩波書店所収, 18-41)
- 大森荘蔵 (1980) 三つの困惑, 沢田充茂他編『科学と存在論』思索社所収, 259-280
- 大津由紀雄編 (1987) ことばからみた心—生成文法と認知科学, 東京大学出版会
- 坂原茂・三藤博 (1988) メンタル・スペース理論と名詞句解釈のアルゴリズム『談話・意味・語用論』科学研究費特定研究成果報告, 53-66
- 坂原 茂 (1990) 役割, ガ・ハ, ウナギ文『認知科学の発展 Vol.3』講談社サイエンティフィック, 29-66
- 鈴木重幸 (1972) 主語論の問題点『言語』第4巻第3号, 212-219
- 鈴木孝夫 (1971) 言語における人称の概念について『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第2号, 141-156
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波新書
- 田窪行則 (1989) 名詞句のモダリティ『日本語のモダリティ』くろしお出版, 211-233
- 土屋 俊 (1987) 認知科学の全体像『言語』第16巻第4号, 20-30
- WITTGENSTEIN, Ludwig (1968) Notes for Lectures on "Private Experience" and "Sense Data", in Philosophical Review, 77, 271-320
- 山岡政紀 (1988) 疑似命令文——日本語モダリティの文法化の一事例『日本語と日本文学』第10号, 筑波大学国語国文学会, 左11—左19
- 山岡政紀 (1989 a) 発話行為論とモダリティ——疑似意向文をめぐって『言語学論叢』第6・7号, 筑波大学一般応用言語学研究室, 16-28
- 山岡政紀 (1989 b) 授受補助動詞と依頼行為『文芸言語研究・言語篇』第17号, 筑波大学文芸・言語学系, 19-33
- 山岡政紀 (未発表) 経験の帰属空間と形容詞述語文の諸問題
- 山内志朗 (1988) 普遍記号学と AI『理想』第640号, 52-64

(やまおか・まさき, 本学 助手)